

# 共立女子大学・短期大学図書館蔵本『伊呂波類聚和歌注』和歌翻刻(巻一)

岡田ひろみ 飯田さやか  
五味澤瞳 山崎怜奈 高橋裕子

## 【はじめに】

本稿は、本学図書館所蔵『伊呂波類聚和歌注』（いろはるいじゅうわかちゅう）巻一の和歌部分の翻刻である。本書は、四冊（巻一～巻四）、写本。横ヨコ×縦タテ。山鳩色地小菊模様表紙。縹色の紙で補修したあとがみえる。五つ目綴じ。楮紙。外題は書き題箋（第一冊「伊呂波類聚和歌注一 自伊至加」「伊呂波類聚和歌注二 自与至具」「伊呂波類聚和歌注三 自屋至阿」「伊呂波類聚和歌注四終 自佐至須」。序や奥書はなく、最終丁に「菊亭家」の蔵書印がある。「菊亭家」は、鎌倉時代末期、西園寺実兼男兼季が邸宅とした今出川に菊を愛好し植えたことからとられた名称。「菊亭家」の文書は京都大学、専修大学に「菊亭文庫」として所蔵されているが、本書は管見の限り、本学と京都大学にみられるのみの貴重な写本である。作者、書写人物等不明だが、書写されたのは江戸前期でも早い時期と考えられる。

万葉集・新古今和歌集・拾遺愚草を中心に、その他様々な歌集の和歌をいろは順に並べ、和歌の左に注釈を記す形

式をとった作歌のための手引き書と考えられるが、内容については今後精査する必要がある。重複歌も複数みられるが、注がかなり異なり、意図的に再掲したと考えられる。巻一において最も多く引かれているのは定家の歌である。今回は、本書の和歌掲出の傾向を探る一助とするために、まずは巻一（「い」）「か」に収載された三〇九首の和歌を翻刻した。この和歌翻刻は文芸学研究所日本文学領域「古代日本文学研究B」の授業の一環として行った。1～50を全員で、51～100を山崎怜奈、101～150を高橋裕子、151～200を五味澤瞳、201～250を飯田さやか、251～309を岡田ひろみが担当した。左注及び巻二～巻四は稿を改めて紹介予定である。

## 【凡例】

共立女子大学短期大学図書館蔵本『伊呂波類聚和歌注』巻一（「い」）「か」までの「和歌」を翻刻する。「ろ」「へ」「り」「る」は立項されていない。翻刻に際しては、原本に忠実であるよう努めたが、以下のような方針で手を加えた。

- 一、見出し和歌・傍書・歌集名・歌人名のみを翻刻し、和歌に通し番号を付した。
- 一、原則として、変体仮名はすべて現行の平仮名に改め、漢字は通行の字体に改めた。
- 一、ミセケチはすべて「取り消し線」で示す。
- 一、傍記は、該当本文横に記す。なお、補入記号は「・」で示す。
- 一、傍書や歌人名等が二行書になっている場合は、原則として◇でくくった。
- 一、【】には和歌出典を記した。巻数、部立、歌番号など、原則として、すべて新編国歌大観（日本文学Web図書館）による。

一、紙幅の都合上、万葉集は「万」、新古今和歌集は「新古」、拾遺愚草は「拾愚」、拾遺愚草員外は「員外」と略して示している。万葉集、新古今和歌集、拾遺愚草、拾遺愚草員外以外の歌集名も、新編国歌大観（日本文学 Web 図書館）によって略している。例 夫木和歌抄↓夫木 五代集歌枕↓五代枕

一、見出し和歌に歌集名が記されていない場合は、その歌を所収する最も古い歌集名を記した。「最も古い」とする基準は、新編国歌大観（日本文学 Web 図書館）の「集成立年順」による。見出し和歌に示されている歌集に和歌が見いだせない場合は、「なし」と書いた上で、勅撰集もしくは所収されている最も古い歌集名を示す。

## 伊 (い)

- 1 万葉 いやことも早日の本へ大とものみつのはま松待恋ぬらん 【万、卷一、雑歌、63】
- 2 同 石見のやたかつの山の木のまより我ふる袖を妹みつらんか 【万、卷二、相聞、132】
- 3 同 家にあれはけにもいひを草枕旅にしあれは椎のはにもる 【万、卷二、挽歌、142】
- 4 同 いつしかも神さひにけるかこ山のむ枚かもとに苔おふるまで 【万、卷三、雑歌、261】
- 5 同 いそさきを漕てかくれば近江の海八十の湊にたつさはになく 【万、卷三、雑歌、275】
- 6 同 妹か家に咲たる花の梅の花みにしなりなはともかくもせむ 【万、卷三、譬喩、402】
- 7 同 今更に何をか思はむ打なひき心は君によりにしものを 【万、卷四、相聞、508】
- 8 同 いせの海の磯もと、ろによする波かしこき人に恋わたるかも 【万、卷四、相聞、603】
- 9 同 いかならん日の時にかも声しらん人のひさのへ我まくらせん 【万、卷五、雑歌、814】
- 10 同 いかになせむ猶こりすまのうら風にくゆる煙のむすほ、れつ、 【なし、三体和、恋、5】

- 11 新古夏 いかなれはそのかみ山の葵草年はふれとも二葉成らん 小侍従 【新古、卷三、夏歌、183】
- 12 同夏 いさり火の昔の光ほのみえて昔屋の里にとふほたるかな 撰政殿 【新古、卷三、夏歌、255】
- 13 妹か家はい入にたてる青柳に今日やなくらん鶯のこゑ 【後撰、卷一、春上、41】
- 14 稲妻は照さぬ宵もなかりけりいつ、ほのかにみえしかけるふ 【新古、卷十五、恋歌五、1354】
- 15 新古秋 いなは吹風にまかせて住庵は月そまことに守あかしける 【新古、卷四、秋歌上、428】
- 16 新古冬 磯のかみふる野の小篠霜をへて一夜はかりに残る年哉 〈撰政太政大臣〉 【新古、卷六、冬歌、698】
- 17 同雑中 今はとて妻木こるへき宿の松千代をは君と猶祈る哉 俊成 【新古、卷十七、雑歌中、1637】
- 18 同春上 今はとてたのむの雁もうち侘ぬ臘月よの曙あかつきの空 寂蓮 【新古、卷一、春歌上、58】
- 19 同夏 いかにせんこぬよあまたの子規またしと思へは村雨の空 家隆 【新古、卷三、夏歌、214】
- 20 新古此哥ホ也不審 時鳥深き峯より出にけり外山のすそに声の落来る 西行 【新古、卷三、夏歌、218】
- 21 新古夏 いか斗田子のもすそもそほつらん雲まもみえぬ比の五月雨 〈伊勢太輔〉 【新古、卷三、夏歌、227】
- 22 新古秋 いつも聞ふもとの里と思へ共きのふにかはる山下風のかせ 〈後徳大寺左大臣〉 【新古、卷四、秋歌上、288】
- 23 同秋 入日さす麓の尾花打なひき誰秋風に鶉鳴らん 通光 【新古、卷五、秋歌下、513】
- 24 同冬 筏士よまでこと、はん水上はいか斗おこふく山のあらしそ 〈藤原資宗〉 【新古、卷六、冬歌、554】
- 25 同 石はしる初せの河の波枕はやくも年の暮にける哉 〈後徳大寺左大臣〉 【新古、卷六、冬歌、703】
- 26 同別 いつくにかこよひは宿をかり衣日も夕くれの峯のあらしに 定家 【新古、卷十、羈旅、952】
- 27 同恋 石の上ふるの神秋ふりぬれと色には出す露も時雨も 撰政殿 【新古、卷十一、恋歌一、1028】
- 28 同恋 今こんと契りし事は夢ながら見しよににたる有明の月 通光 【新古、卷十四、恋歌四、1276】

- 29 同恋 今はた、心の外に聞物をしらすかほなる萩のうは風〔式子内親王〕【新古、卷十四、恋歌四、1309】
- 30 同恋 いつも聞ものや人の思ふらんこぬ夕暮の松風のこゑ 撰政殿【新古、卷十四、恋歌四、1310】
- 31 いきてよもあすまで人はつらからし此夕暮をとほ、とへかし 式子内親王【新古、卷十四、恋歌四、1329】
- 32 同恋 色かはるはきの下葉をみても猶人の心の秋ぞ知る、相模【新古、卷十五、恋歌五、1353】
- 33 同恋 今よりはあはしとすれや白妙の我衣手のかはく時なき 〔読人不知〕【新古、卷十五、恋歌五、1428】
- 34 同雑 色香を思ひもいれす梅花常ならぬ世によそへてそみる 花山院【新古、卷十六、雑歌上、1445】
- 35 同 いかにして袖に光のやとるらん雲の月は隔来し身を 〔俊成〕【新古、卷十六、雑歌上、1510】
- 36 拾愚 今もこれすきても春の俤ははなみるみちの花のいろく 〔拾愚、上、二見浦百首、112〕
- 37 同 石はしる滝こそ今日もいとほるれ散てもしはし花はみましを 〔拾愚、上、二見浦百首、115〕
- 38 同又千載雑中 いつこにて風をも世をも恨みまし芳野のおくも花は散けり 〔拾愚、上、二見浦百首、116／千載、卷十七、雑中、1073〕
- 39 同 いかにしてしつ心なく散花・のとけき春のいろと見ゆらん 〔拾愚、上、皇后宮大輔百首、212〕
- 40 同 いか斗後も忘れぬつまならん桜になる、宿の夕くれ 〔拾愚、上、花月百首、620〕
- 41 同又風雅春中 いつもみし松の色かははつせ山さくらにもる、春の一しほ 〔拾愚、上、秋日侍太上皇仙洞同詠百首、製和歌、912／風雅、卷二、春中、158〕
- 42 同 石はしる滝ある花の契りにてさそは、つらし春のやまかせ 〔拾愚、上、春日同詠百首、製和歌、1381〕
- 43 同 いくかへりゆき、の空を恨むらん谷には春の身をわすれつ、 〔拾愚、中、冬日同詠廿首、製和歌、1972〕
- 44 同 いく度かわか君か代にあらためん日影のどけき玉つはきかな 〔員外、125〕

- 45 同 いとほしよ月にたな引浮雲も秋のけしきとならぬ物かは 【拾愚、上、二見浦百首、138】
- 46 同又千載雑上 いかにせむさらてうき世はなくさますたのみし月も涙落けり 【拾愚、上、皇后宮大輔百首、234  
／千載、卷十六、雑上、1004】
- 47 同又新拾遺哀傷 いろはみなむなしき物を立田河紅葉なかる、秋も一とき 【拾愚、上、重奉和早率百首、587  
新拾遺、卷十、哀傷、851】
- 48 同 今よりの木すゑの秋はふかく共月いつる峯は風のまに〜 【拾愚、上、花月百首、696】
- 49 同 いもとわれと入さの山は名のみして月をそしたふ有明の空 【拾愚、上、秋日侍太上皇仙洞同詠百首応製和歌、  
983】
- 50 同 泉河日もゆふ暮のこまにしきかたえたち行秋の紅葉は 【拾愚、上、春日同詠百首応製和歌、1354】
- 51 同 色に出て秋の梢そうつり行むかひのみねのうかふさかつき 【拾愚、中、韻歌百廿八首、1642】
- 52 同 今いくか秋もあらしの横雲にいつれはしらむ山のはの月 【拾愚、中、院句題五十首、1888】
- 53 同 いへはえにおさふる袖も朽ちはてぬ玉のをことの秋のしらへに 【拾愚、中、権大納言家三十首、2074】
- 54 同 いさこえし思へは遠き古郷をかさなる山の秋のゆふきり 【拾愚、下、秋、2317】
- 55 同 今はとて鳴もたつなり秋のよの思ひの底に露は残りて 【員外、162】
- 56 同 いたつらに松の雪こそつもるらめわか踏分しあけほの、山 【拾愚、上、関白左大臣家百首、1447】
- 57 同 いつの日か色にはいてんよるの露のなくや澤辺の雪の下草 【拾愚、中、権大納言家三十首、2059】
- 58 同 いはせ野や鳥ふみたて、はしたかのこすえもゆらに雪は降つ、 【拾愚、中、寛喜元年十一月女御入内屏風  
和歌、2119】

- 59 同 いつはりのなき世也けり神無月たかまことより時雨そめけん 【拾愚、下、冬、2408】
- 60 同 池にすむ有明の月のあくるよををのか名しるくうきねにぞ鳴 【拾愚、下、冬、2411】
- 61 同 池の面は氷やはてんとちそふるよころの数を又しかさねは 【拾愚、下、冬、2434】
- 62 同 岩波のひ、きはいそくたひの庵をしつかにすめる冬のよの月 【拾愚、下、雑、2922】
- 63 同 色に出音にもたてす柴この庵のイの庵の時雨の後にこほるなみたは 【員外、詠百首和歌、590】
- 64 同 いかにせむ雪さへけさはふりにけり篠分し野の秋の通路 【拾愚、上、閑居百首、365】
- 65 同 命たにあらはあふせをまつら河かへらぬ波もよとめとそおもふ 【拾愚、上、内大臣家百首、1173】
- 66 同 いかにせんあふよをまさる歎にて又それならぬなくさめはなし 【拾愚、上、閑居百首、376】
- 67 同 いかにせむ夢より外にみし夢はこひに恋ますけさのなみたを 【拾愚、上、重奏和早率百首、575】
- 68 同 いつかさは又は逢せをまつらかたこの河上にいへはすむとも 【拾愚、上、歌合百首、882】
- 69 同 いはさりき我身ふるやの忍ふ草思ひたかへて種をまけとは 【拾愚、上、歌合百首、886】
- 70 同 今そ思ふいかなる月日ふしのねの峯に煙の立はしめけん 【拾愚、上、春日同詠百首応製和歌、1371】
- 71 同 今のまの我身にかきる鳥のねをたれうき物と帰そめけん 【拾愚、上、関白左大臣家百首、1461】
- 72 同 いこま山いさむる峯にある雲のうきて思ひはきゆる日もなし 【拾愚、中、仁和寺宮五十首、2046】
- 73 同 いかにせん海人のしほ本ひ絶すたつ煙によはるうら風もなし 【拾愚、中、仁和寺宮五十首、2048】
- 74 同 色わかぬ闇のうつゝの一言に袖の千入はいと、そめつ、 【拾愚、中、権大納言家三十首、2076】
- 75 同 いつわれもふてのすさひにとまりゐて又なき人の後といはれん 【拾愚、上、重奏和早率百首、598】
- 76 一本此歌無 いつこにかこよひは宿をかり衣日もたくれの岑前ヒアラのあらしに 【拾愚、下、雑、2679】

77 同 板ひさしひさしくとはぬ山里も波まにみゆる卯花のころ 【拾愚、上、重奏和早率百首、522】

78 同 色わかぬ秋の烟のさひしきは宿より遠の宿に焼柴 【拾愚、中、韻歌、1637】

79 いにしへはいともかしこし堅田鮎つ、みやきなる中の玉つさ 【新六帖、三帖、966】

80 岩代の濱松かえを引給ひまさしくあらは今帰り来ん 【万、卷二、挽歌、141】

81 いかてかく思ひ初けんほと、きす雪のみ山の法の聲かと 【和一字、下、906】

82 伊駒山あらしも秋の色に吹手染の糸のよるぞ悲しき 定家 【建保百、秋二十首、483】

83 二首 二郎百首 二有 いなのめはいしのかけはしほのくとしはしやすらふまほならず共 俊頼 【永久百、春十八首、

241】

84 同 いなり山さかしくとまる心哉みな秋の葉をふける庵に 女房 【永久百、春十八首、67】

85 伊駒山たむけはこれか木の本にいはくらうちて榊たてけり 兼昌 【永久百、雑三十首、573】

### 波（は）

86 万 はつせ河なかる、みおの瀬を早み井手こす波の春のさやけさ 【万、卷七、雑歌、1112】

87 同 はなれそにたつるむろの木うたかたも久しき年を過にけるかも 【万、卷十五、3622】

88 拾愚 春しらぬ憂身ひとつにとまりけり暮ぬるくれをおしむ歎は 【拾愚、上、奉和無動寺法印早率露胆百首、420】

89 同 花さかりむなしき山に鳴猿の心しらる、春のよの月 【拾愚、上、十題百首、766】

90 花は秋芳野の山はみわの山春のしるしと立まさりけり 慈鎮 【慈鎮合、193】

91 新古秋上 花薄又露ふかしほに出はなかめしと思ふ秋のさかりを 式子内親王 【新古、卷四、秋歌上、349】



- 92 同春下 花の色に天さる霞たちまよひ空さへにほふ山桜かな 長家【新古、卷二、春歌下、103】  
 93 箸たかの野守の鏡えてしかなおもひ思はずよそなからえん 【新古、卷十五、恋歌五、1432】  
 94 古春下 花の色は移りにけりない、たつらに我身世にふる詠せしまに 小町 【古、卷二、春歌下、113】  
 95 蓮葉の上はつれなきうらにこそ物あらかひはつくといふなれ 【後撰、卷十三、恋五、903】  
 96 蓮葉のはいにそ人は思ふらん世には恋路の中におひつ、 【後撰、卷十五、雜一、1088】  
 97 早瀬河みおさかのほる鶺鴒かひ舟先此世にもいか、苦しき 崇徳院 【久安百、28】  
 98 花の陰た、まくおしき今夜哉錦をさらす庭とみえつ、 【元輔、92】  
 99 拾遺春 春くればまつそうちみる磯の上めつらしけなき山田なれ共 忠見【拾遺、卷一、春、45】  
 100 春はおし子規はた聞まほし思ひわつらふしつこ、ろかな【拾遺、卷十六、雜春、1066】  
 101 箸たかのかとかへる山の椎柴の葉かへはずとも君はかへせし 【拾遺、卷十九、雜恋、1230】  
 102 新古雜中 花ならてた、柴の戸をさして思ふ心のおくもみよしの、山 慈圓【新古、卷十七、雜歌中、1618】  
 103 同春上 春の夜の夢の浮橋と絶して峯にわかる、横雲の空 定家【新古、卷一、春歌上、38】  
 104 同秋上 花見にと人やりならぬ野へにきて心のかきり尽しつる哉 経信【新古、卷四、秋歌上、342】  
 105 新古秋 初かりの羽かせず、しく成ま、に誰か旅ねの衣かへさぬ 躬恒【新古、卷五、秋歌下、499】  
 106 同雜歌賀 初春の初子のけふの玉は、き手にとるからにゆらく玉の緒 よみ人しらす【新古、卷七、賀歌、708】  
 107 同雜 春をへてみゆきになる、花の陰古行身をも哀とや思 定家【新古、卷十六、雜歌上、1455】  
 108 拾愚 花ゆへに春はうき世をおしまる、おなし山ちにふみまよへ共 【拾愚、上、初学百首、10】  
 109 同 春雨よ木葉みたれし村時雨我もまきる、方は有けり 【拾愚、上、閑居百首、308】

- 110 同前ニアリ 春しらぬ憂身ひとつにとまりけり暮ぬるくれをおしむ歎は 【拾愚、上、奉和無動寺法印早率露胆百首、420】
- 111 同 花を思ふ心にやとる真葛原秋にもかへす風のをと哉 【拾愚、上、花月百首、647】
- 112 まへ二有 花さかりむなしき山に鳴猿の心しらるゝ春のよの月 【拾愚、上、十題百首、766】
- 113 同 春雨のふりにし里をきてみればさくらの散にすかるみの虫 【拾愚、上、十題百首、779】
- 114 同 春霞きのふをこそこのしるしとや軒はの山も遠さかるらん 【拾愚、上、夏日侍、1001】
- 115 同 春といへは花やは遠き芳野山さえぬ雪のかすむ明ほの 【拾愚、上、夏日侍、1002】
- 116 同 花のかも風こそよそにさそふらめ心もしらぬふる郷の春 【拾愚、上、夏日侍、1017】
- 117 同 春はたゝ霞斗の山のはにあかつきかけて月いつるころ 【拾愚、上、内大臣家百首、1115】
- 118 同 花鳥の匂ひも聲もさもあらはあれ由良の三崎の春の日暮し 【拾愚、上、内裏百首、1215】
- 119 同 春の色をいく万代かみなせ河霞の洞の苔のみとりに 【拾愚、上、内裏百首、1217】
- 120 同 花のいろに一春まけよかへる雁とし越路の空たのめして 【拾愚、上、春日同詠百首応製和歌、1315】
- 121 同 春霞かすめる空の難波えに心ある人や心みゆらん 【拾愚、下、春、2143】
- 122 同 はるかなるはつ音は夢か時鳥雲のたゝちはうつゝなるらん 一本ニらねはイ 【拾愚、中、院五十首、1792】
- 123 同 花薄草のたもとも朽はてぬなれて別れし秋をこふとて 【拾愚、上、夏日侍、1061】
- 124 同 初雁のたよりもすくる秋かせにことゝひ兼てころもうつ聲 【拾愚、中、院五十首、1805】
- 125 同 花そめの衣の色も定まらず野分になひく秋の村雨 【拾愚、下、秋、2342】
- 126 同 初雁のとをちもよほす秋風になれてまちかき中そかれ行 【拾愚、下、秋、2359】

- 127 同 はしめなき月の行系に身をかへて更は心のはてをしらはや 【員外、48】
- 128 同 晴くもりおなし眺のたのみたにしくれにたゆるをちの里人 【拾愚、上、二見浦百首、155】
- 129 同 濱千鳥なけのかたみか友千鳥と渡りすつる沖の小しまに 【拾愚、中、仁和寺宮五十首、2042】
- 130 同 濱千鳥とまらは雪の跡もうし鳴てもいなんかたはなきさに〇〇イ 【員外、566】
- 131 同 はてはた、海人のかるもをやとりにて枕さたむるよひくそなほイ 【拾愚、上、夏日侍、1087】
- 132 同 初よりあふは別れと聞なからあかつきしらて人を恋ける 【拾愚、上、関白左大臣家百首、1465】
- 133 同 春毎の鴨の羽色の駒なれと今日をそひかん千代の例に 【拾愚、下、春、2127】
- 134 同 花山の跡を尋し雪の色に年ふる道の光をそみる 定家 【拾愚、中、入道皇太后宮大夫九十賀屏風歌、1917】
- 135 春霞東よりこそ立にけれあさまのたけは雪けなからに 後京極殿 【三体和、旅、7】
- 136 花さかり霞の衣ほころひて峯白妙の天のかく山 定家 【拾愚、下、春、2158】
- 137 濱千鳥妻とふ月の影さむし芦の枯葉の雪の下風 定家 【拾愚、下、冬、2443】
- 138 新古恋 にこり江のすまん事こそかたからめいかてほのかに影をみましせまし也や〈讀人不知〉【新古、卷十一、恋歌一、1053】
- 139 拾愚 匂ふより春は暮ゆくやまふきの花こそ花の中につらけれ 【拾愚、上、関白左大臣家百首、1413】
- 140 同 庭も背に移ふ比の桜花あした侘しき数まさりつゝ、 【拾愚、下、春、2175】
- 141 同 庭の面に植をく秋の色よりも月にそやとの心みえける 【拾愚、上、花月百首、666】

仁(に)

143 142 同 西をおもふ涙にそへて引玉の光あらはす秋の夜の月 【拾愚、下、雑、2972】  
にゐはりのそしろの門田植しより秋は聞こそ定さりけれ 公実 【堀河百、雑廿首、1505】

保(ほ)

145 144 万 子規なきわたりぬとつくれ共われき、つかす花はちりつ、 【万、卷十九、4218】  
新古雑恋 時鳥その上山のたひまくらほのかたらひし空ぞ忘ぬ 式子内親王 【新古、卷十六、雑歌上、1486】  
後撰夏 ほと、きす暁方の一聲はうき世中をすくすなりけり 【後撰、卷四、夏、197】  
時鳥一聲にあくる夏の夜のあかつきかたやあふこなるらん 【後撰、卷四、夏、191】  
佛には桜の花をたてまつれわか後の世を人とふらは、 西行 【山家、上、春、78】  
新古夏 時鳥なを一聲は思ひ出よおひその杜のよはのむかしを 民部卿範光 【新古、卷三、夏歌、207】  
拾愚 子規いつるあなしの山かつらいまやさと人かけて待らん 【拾愚、下、夏、2217】  
ほりえには玉しかましを大君の御船よらんと兼てしりせは 【万、卷十八、4080】

登(と)

152 万葉 燭のあかしのなたの入えにやこき分れなん家のあたりみて 【万、卷三、雑歌、255】  
153 同 年月もいまたへなくに飛鳥河せ、にわたせる岩橋もなし 【万、卷七、雑歌、1130】  
154 新古恋二 年もへぬ祈る契りははつせ山尾上の鐘のよその夕暮 定家 【新古、卷十二、恋二、1142】  
155 としの明てうき世の夢の覚へしはくるともけふは厭はさらまし 【新古、卷六、冬歌、699】

- 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161 160 159 158 157 156
- 新古恋二 牀の霜枕のこほりきえわひぬむすひもをかぬ人の契に 定家【新古、卷十二、恋歌二、1137】
- 問人もなき宿なれとくる春は八重葎にもさはらさりけり 貫之【新勅撰、卷一、春歌上、8】
- 新古雜賀 年へたる宇治の橋守こと、はんいく世になりぬ水のみな上 清輔【新古、卷七、賀歌、743】
- 此哥前二有一本無 年もへぬ祈る契りははつせ山おのへの鐘のよその夕くれ【拾愚、上、歌合百首、856 / 154と  
同じ】
- 拾愚 とまらぬは桜はかりを色に出てちりのまよひにくる、春かな【拾愚、上、夏日侍、1018】
- 同 とはて来し蓬か門のいかならん空さへとつるさみたれの比【拾愚、上、重奏和早率百首、528】
- 同 とけてねぬ伏見の里は名のみしてたれ深きよに衣うつらん【拾愚、上、重奏和早率百首、551】
- 同 とはる、を誰はかりとや眺むらん雪のあさけの岩のかけ道【拾愚、上、春日同詠百首応製和歌、1368】
- 同 とまらしの四方の時雨の古郷になりにしならの霜の朽葉も【拾愚、上、春日同詠百首応製和歌、1358】
- 〈新古イ同〉 友したふ千鳥鳴也ひれふりし松浦の山の跡の汐風【なし / 員外、冬廿、187】
- 同新古秋上 時わかぬ波さへ色にいつみ河は、その杜にあらしふくなり【拾愚、上、歌合百首、837 / 新古、卷五、  
秋歌下、532】
- 同 時のまのよはの衣の濱ゆふや歎そふへき御熊野のうら【拾愚、上、内裏百首、1277】
- 同新古一本又同哥アリ不審 年もへぬ祈る契りははつせ山おのへの鐘のよその夕くれ【新古、卷十二、恋歌二、1142  
 / 拾愚、上、歌合百首、856 / 154・159と同じ】
- 同 時つ風ふけるのうらにあかゐてもたかためいける身をおしまん【拾愚、上、夏日侍、1089】
- 同 と、め置し袖の中にや玉くしけ二見の浦はゆめもむすはす【拾愚、下、恋、2566】

171 同年をへて心の空にかくれともあはれへたつる峯の雲哉 【員外、雑、100】

172 同年月はきのふはかりの心地してみなれし友のなきそおほかる 【拾愚、中、韻歌、1681】

173 同年へぬる宿たち出る椎かもとよりゐし石も苔青くして 【拾愚、中、韻歌、1702】

174 同とをつかた芳野のくすもいつしかにつかへそまつる春の始に 〈衣笠内大臣〉 【なし／歌枕名寄、卷七、吉野篇、2284】

175 とへかしな玉くしのはにみかくれて鴟の草茎目ちならずとも 【六条修、338】

176 此哥一本アリ ともしする宮城か原のした露にしのみもちすり 【堀河百、夏十五首、418】

### 知(ち)

177 万 千鳥鳴さほの河との瀬を廣み打橋渡すなかくと思へは 【万、卷四、相聞、531】

同 千鳥なくさほの河との清原きせを駒うち渡しいつかかよはん 【万、卷四、相聞、718】

契イさやおなし嵐の松にきておもかけはらふ入あひのかね 【松下、自歌合三百六十番、3033】

新古秋 ちきらねと一よはすきぬ清見かた波にわかるる暁の雲 家隆 【新古、卷十、羈旅歌、969】

同 千鳥鳴く河への茅原風さえてあはてそかへる有明の空 同 【水無瀬、128】

182 新古秋 千度うつ砧の音に夢覚て物思ふ袖の露そくたつる 〈式子内親王〉 【新古、卷五、秋歌下、484】

183 同恋 散すなよよしの、は草のかりにても露かゝるへき袖の上かは 【新古、卷十二、恋歌二、1111】

184 拾愚 散すなよ三笠の山の桜花おほふはかりの袖ならずとも 【拾愚、中、院句題五十首、1836】

185 同又新勅賀 散りもせし衣にすれる葉竹の大宮人のかさすさくらは 【拾愚、中、寛喜元年十一月女御入内御屏風

和歌、2124 / 新勅、卷七、賀歌、482]

同 ちかしとも秋のけしきのみゆる哉みたる、ほたる山のはのほし 【員外、33】

千早振香椎のみやのあや杵は神のみそき御に立るなりけり 【新古、卷十九、神祇歌、1886】

散にけりあはれ恨の誰なれば花のあと、ふ春の山かせ 【新古、卷二、春歌下、155】

ちはやふる神の心のある、海にか、みを入れてかつ見つるかな 【袖中抄、卷二十、1072】

### 怒（ぬ）

新古雜祝賀 ぬれてほす玉くしのはの露霜に天ちる光幾世へぬらんな 摂政殿 【新古、卷七、賀歌、737】

拾員 ぬき置しかたみもしらす藤はかまあらしのかせの色に任せて 【員外、158】

### 遠（を）

万葉 乙女子かうみをのた、りうちそかけうむ時なくも恋わたるかも 【万、卷十二、寄物陳思、3003】

拾愚 をのつから身をうち山の宿かれはさもあらぬ月の影も住けり 【拾愚、中、院句題五十首、1853】

女郎花野への古里思ひ出てやとりし虫の声やこひしき 【元真、63】

拾愚 小倉山秋の哀やのこらまし男鹿のつまのつれなからすは 【拾愚、上、内裏百首、1236】

新古夏 をのかつま恋つ、鳴や五月闇神なひ山の山ほと、きす 〈読人不知〉 【新古、卷三、夏歌、194】

拾愚此哥一所なり 遠方や花にいはひて行駒の聲も春なる永日くらし 【拾愚、上、奉和無動寺法印早率露胆百首、

412】

198 拾愚 をのつからそこともしらぬ月はみつくれなはなけの花を頼みて 【拾愚、上、秋日侍太上皇仙洞同詠百首】

応製和歌、917】

199 同 をそくときいつれの色に契るらん花まつ頃のきしの青柳 【拾愚、中、仁和寺宮五十首、2013】

200 同又続後拾遺夏 をしてのや難波ほりえに敷玉のよるの光は螢なりけり 【拾愚、上、内裏百首、1228 / 続後拾、

卷三、夏歌、229】

201 同 をのつから身をうち山に宿かれはさもあらぬ月の空も侘けり 【拾愚、中、院句題五十首、1853】

202 同 男鹿なくは山の陰のふかけれはあらしまつ秋の月そすくなき 【拾愚、下、秋、2299】

203 同又続後撰秋下 小倉山時雨し比の朝な／＼きのふはうすき四方の紅葉は 【拾愚、下、秋、2392 / 続後撰、卷第七、

秋歌下、418】

204 同 をち方やはるけき道にゆき積りまつ夜かさなる宇治の橋姫 【拾愚、上、皇后宮大輔百首、249】

205 同又続古今冬 をはつせや峯のときは木吹しほりあらしにくもる雪の山もと 【拾愚、中、最勝四天王院名所御障

子歌、1922 / 続古今、卷第六、冬歌、649】

206 同 をのれのみ海人のさかてをうつたへにふりしく木葉跡たにもなし 【拾愚、上、関白左大臣家百首、1471】

207 同 をしほ山ちよのみとりの名をたにもそれとはいはぬくれそ久しき 【拾愚、下、恋、2586】

## 和（わ）

208 万 吾せこはいつちなるらん沖つものかくれの山を今日かこゆらん 【万、卷一、雑歌、3 / 卷第四、相聞、514】



- 同 わきもこに恋つゝ、あらずは秋萩の咲て散ぬる花にあらましを 【万、卷二、相聞、120】
- 同 我命まことさちあらは又もこんしかの大江によする白波 【万、卷三、雑歌、291】
- 同 わかせこをなごしの山のよふこ鳥君よひかへせ夜の更ぬ時 【万、卷十、春雑歌、1826】
- 新古賀 我道をまもらは君を守るらん齡はゆつれ住吉の松 定家 【新古、卷七、賀歌、739】
- 拾愚 忘れぬやさは忘れけり我心夢になせとそいひて別し 定家 【拾愚、上、皇后宮大輔百首、268】
- 新古恋 我恋は庭のむらはさくら枯て人をも身をも秋の夕暮 慈鎮 【新古、卷十四、恋歌四、1322】
- 同恋三 我恋はいはぬ斗そ難波なる芦のしのひの下にこそたけ 小弁 【新古、卷十一、恋歌一、1063】
- 同夏 吾心いかにせよとて子規雲まの月の影になくらん 俊成 【新古、卷第三、夏歌、210】
- 新古恋 わか恋は松を時雨のそめ兼てまくすか原に風さはく也 慈圓 【新古、卷十一、恋歌一、1030】
- 同恋二 吾恋はあふをかきりの影たに向後もしらぬ空の浮雲 通具 【新古、卷十二、恋歌二、1135】
- 後撰恋四 わか宿とたのむ芳野に君しいらは同しかさしをさしてこそはせめ 伊勢 【後撰、卷十二、恋四、809】
- わきも子か紅そめの色とみてなつさはれぬる岩つゝ、しかな 【後拾遺、卷二、春下、151】
- 新古恋 忘れやあふひを草に引むすひかりねの野への露の曙 〈式子内親王〉 【新古、卷三、夏歌、182】
- 同恋二 我恋はちきのかたそきかたくのみ行あはて年の積ぬる哉 〈大炊御門右大臣公能〉 【新古、卷十二、恋歌一、1114】
- わひ人はうき世中にいけらしと思ふ事さへかなはさりけり 【拾遺、卷八、雑上、505】
- 〈前ニアリ新古恋〉 わか恋は庭の村萩うら枯て人も身をも秋の夕ぐれ 【新古、卷十四、恋歌四、1322】
- 同雑歌 わするなよやとる袂はかはるともかたみにしつるよはの月影 定家 【新古、卷九、離別歌、891】

- 226 〈前ニアリ 同恋〉 我恋は松を時雨にそめ兼てまくすか原に風さはく也 【新古、卷十一、恋歌一、1030】
- 227 恋同 わくらはにまちつるよひも更にけりさやは契りし山のはの月 〈京極摂政殿〉 【新古、卷十四、恋歌四、1282】
- 228 拾愚 わすれはや花に立まよふ春霞それかと斗みえし明ほの 【拾愚、下、恋、2536】
- 229 同 我心やよひの後の月の名にしろき垣ねの花さかりかな 【員外、600】
- 230 同 忘れ水絶まゝのかけみればむらこにうつる萩か花すり 【拾愚、上、皇后宮大輔百首、227】
- 231 同 侘人のわかやとからの松風そなけきくは、るさをしかの声 【拾愚、上、重奉和早率百首、545】
- 232 同 忘れしの契うらむる古郷の心もしらぬ松むしのこゑ 【拾愚、上、歌合百首、80】
- 233 同 我頼む心の底を照し見よみもすそ河にやとる月影 【拾愚、中、院五十首、1826】
- 234 同 わきてにも天とふ雁はをきもせし宿から深き萩の朝露 【拾愚、中、仁和寺宮五十首、2028】
- 235 同 我恋は君にもはては忍ひけり何をはしめと思ひ初けん 【拾愚、上、皇后宮大輔百首、251】
- 236 同 忘れぬやさは忘けりわか心夢になせとそいひて別し 【拾愚、上、皇后宮大輔百首、268】
- 237 同 わすれ貝それも思ひの種たえて人を見ぬめのうらみてそぬる 【拾愚、上、内大臣家百首、1172】
- 238 同 わかれ行程もなくゝまとはれてたのめぬ暮を猶いそくかな 【拾愚、上、奉和無動寺法印早率露胆百首、475】
- 239 同又新古恋四 わすれすはなれし袖もや氷るらんねぬよのこの霜のさ筵 【拾愚、上、歌合百首、895／新古、卷第十四、恋歌四、1291】
- 240 同 侘はつる我思ひねの夢路さへ契しられて吹あらしかな 【拾愚、中、院句題百首、1875】

255 254 253 252 251 250 249 248 247 246 245 244 243 242 241

同 わたつうみによせてはかへるしき波のはしめも終はつも知人そなき 【拾愚、上、十題百首、712】

同 我君の光そ、はん春の宮てらす朝日の千代の行末 【拾愚、上、秋日待太上皇仙洞同詠百首応製和歌、998】

同 わきてなど我のみたえぬ露けさそ山路は誰も旅人そ行 【拾愚、中、仁和寺宮百首、2054】

同 和哥のうらやなきたるあさの身をつくし朽くぬかひなき名たに残らて 【拾愚、下、雑、2710】

我こそは新嶋もりよ沖の海の荒き波風心してふけ 【遠島百、97】

わかたのむ草の根をはむ単そと思へは月のうらめしき哉 俊成 【散木、第三、秋部、496】

われもさは竹の林に身を捨んうへたる虎は有世也けり 頓阿 【夫木、卷二十七、雑部九動物部、12919】

我恋は鳥羽にかくことのはのうつさぬ程はしる人もなし 〈松堀河百首二有顕季〉 【堀河百、恋十首、1141】

わたつみの石のかめたに来る物を古郷遠み恋さらめやは 〈衣笠内大臣〉 【夫木、卷第二十七、雑部九動物部、

13064】

忘なん中く〜またし待とても出にし跡は庭のよもきふ 【三体和、二】

### 賀（か）

万 かた岳のむかひの峯に椎かまいけはことしの夏の陰にならはん 【万、卷七、雑歌、1103】

同 河内女の手染の糸をくりかへし片糸にありと絶んと思ふや 【万、卷七、譬喩歌、1320】

同 かすか山やまたか、らし岩の上のすかのねみんと月待かねつ 【万、卷七、譬喩歌、1377】

風の音のなを色まさる夕かなことしはしらぬあきのこ、ろを 【拾愚、上、関白左大臣家百首、1428】

かはれた、わかる、道の野への草命あにむかふ物は思はし 定家 【六百番、恋歌上、713】

かたちよき人をもみはや山のはの紅うすき横雲のかけ 【草根、曙峰雲、9433】

風ふけはともに後なきうき雲の木葉をうつむ君の棧 青岩 【注】

かはれた、わかる、道の野への草命にむかふ物は思はし 定家 【255に同じ】

新古今春一 帰る雁今はの心ありあけに月と花との名こそおしけれ 〈撰政太政大臣〉 【新古、卷一、春歌上、62】

風ふけは檜の下葉のそよ〜といひ合せつ、いつち過らん 【詞花、卷四、冬、146】

悲しきはさかひことなる中にしてなき玉までや空にうかれん 【六百番、恋部上、873】

拾遺恋三 数ならぬ身を宇治河の網代木に多の日をも過しつる哉 〈読人不知〉 【拾遺、卷十三、恋三、843】

新古今 帰雁今はの心有明に月と花との名こそおしけれ 撰政殿 【259に同じ】

同冬 かつた敷の袖のこほりのむすほ、れとけてねぬよの夢そみしかき 同 【新古、卷六、冬歌、635】

同別 かくてしもあかせは幾夜過ぬらん山ちの露の苔の筵に 俊成 【新古、卷十、羈旅歌、949】

同恋 楫をたえ由良の湊による舟のたよりもしらぬおきつ汐風 〈撰政殿〉 【新古、卷十一、恋歌一、1073】

同恋 かきりあれば忍の山のふもとにも落葉か上の露そみたる、 通光 【新古、卷十二、恋歌二、1095】

同恋二 帰るさの物とや人の詠むらんまつ夜なからの有明の月 定家 【新古、卷十三、恋歌三、1206】

拾愚 枯果し草の戸さしのさひしさも霞にかゝるはるの山さと 【拾愚、上、二見浦百首、106】

同 風ならて心とをちれさくら花うきふしにたに思ひをくへく 【拾愚、上、初学百首、16】

同 霞かは花うくひすにとちられて春にこもれる宿の明ほの 【拾愚、上、歌合百首、810】

同 かさすてふなみもてゆへる山やそれ霞吹とけすまのうら風 【拾愚、上、内大臣家百首、1104】

同 風かよふ花のか、みはくもりつ、春をそかよふ庭のいは、し 【拾愚、中、韻歌、1612】

- 274 同 かへり見る雲より下のわか草にかすむ木末は春のふるさと 【拾愚、中、仁和寺宮五十首、1777】
- 275 同 かり衣立うき花の陰にきて行末くらす春のたひ人 【拾愚、下、春、2147】
- 276 同 かつた糸をよる／＼みねにともす火にあはすは鹿の身をかくしを 【拾愚、上、秋日侍太上皇仙洞同詠百首  
製和歌、932】
- 277 同 から衣かくるいかほの沼水に今日は玉ぬくあやめをそひく 【拾愚、上、内裏百首、1225】
- 278 同 神まつる卯月まち出てさく花の枝もとを、にかくる白ゆふ 【拾愚、中、院五十首、1791】
- 279 同 かへるさの夕は北に吹風の浪たてそふるきしのうの花 【拾愚、中、権大納言家三十首、2063】
- 280 同 かりねせし玉えの芦にみかくれて秋はとなりと風ぞ涼しき 【拾愚、下、夏、2218】
- 281 同 かそふれは秋きて後の月の色をおほめかしくもしほる袖かな 【拾愚、上、花月百首、654】
- 282 同 かきりなき秋のこよひそせかれぬるむら雨なひく雲の遠方 【拾愚、上、歌合百首、831】
- 283 同 かきくもりわひつゝ、ねにしよころたに詠し空に月そ晴行 【拾愚、中、院句題五十首、1851】
- 284 同 風なひく薄の末葉露ふかしこの比こそはつかりのこゑ 【拾愚、下、秋、2319】
- 285 同 又続後撰秋下 河風に夜わたる月の寒ければやそうち人もころもうつ也 【拾愚、下、秋、2321／続後撰、卷七、  
秋歌下、392】
- 286 同 神かきや我身のかたはつれなくて秋にもあへぬくすのうら風 【拾愚、下、雑、2715】
- 287 同 風のまはもとあらの萩の露なからいく世か春をまつ白雪 【拾愚、下、冬、2156】
- 288 同 かつたみこそあたの大野の萩の露うつるふ色はいふかひもなし 【拾愚、上、内大臣家百首、1170】
- 289 同 前モアリ かへるさの物とや人の詠むらん待夜なからの有明の月 【268に同じ】

同 風つらきもとあらのご萩袖にみて更行よはにおもる白露 【拾愚、上、歌合百首、853】

同此哥一本ニアリ かなしさはさかひことなる中にして無玉までやよそにうかれん 【拾愚、上、歌合百首、873】

同 鴨のゐる入江の浪を心にてむねと袖とにさはく恋かな 【拾愚、上、歌合百首、888】

同 かた見そとたのめし事の<sup>ナ</sup>かひもなくうき中のをの絶や果なん 【拾愚、中、院句題五十首、1877】

風ふけはさもあらぬ峯の松もうし恋せん人は都にをすめ 【拾愚、下、恋、2543】

同又新古今恋五 かきやりし其くろかみの筋ことにうちふす程は佛そたつ 【拾愚、下、恋、2640 / 新古、卷十五、

恋歌五、1390】

同 かけひたす水さへ色そみとりなる四方のこ末のおなし若葉に 【拾愚、上、歌合百首、816】

同 かつまたの池は水なし蓮なししかいふ人のひけなきかこと 【なし / 万葉、十六、有由縁并雑歌、3857】

新古 唐人の船をうかへてあそふてふ今日そ我せこ花かつらせよ 【新古、卷二、春歌下、151】

かく斗恋のやまふはおもけれど目にかけて逢ぬ君かな 【金葉二、卷八、恋部下、513】

影さよき月よりおつる袖の雨に雲は秋のよ軒は山のは 慈鎮 【新宮合、32】

堀河 かり金もはねしほるらん真菅生るいなさ細江に雨つ、みせよ 【堀河百首、秋廿首、696】

かちそむるしかまの御園かれ果て逢みて過し神無月哉 兼昌 【永久百首、恋十首、440】

神山の榊をおらは月の中にわか思ふことならさらめやは 常陸 【永久百首、雑三十首、581】

かういろの共にいのれはふたりさすしそくの影に千代そ籠れる 兼昌 【永久百、雑三十首、601】

かしは木にしるの下枝をおりかけてさゆふさまてや臥まるふらん 俊頼 【永久百、雑三十首、606】

かひかねをさやにも見しかけ、らなくよこをりふせるさよの中山 【古今、卷二十、東歌、1097】

309 308 307

雁啼て菊の花さく秋はあれと春の海へに住よしの濱 【業平集、67】

鴈かへる・こよの花のいかなれや月はいつくもおなし春の夜 親定 【三体和、1】

新古 葛木や高天の桜さきにけり立田のおくにかゝるしらくも 【新古、卷一、春上、87】

〔注〕  
257番歌の所収歌集は不明。「青岩」は「清岩之和尚百首」の「清岩」と同じであれば正徹のこと。

百景  
 作  
 山と憶良入磨して見ゆと云のて後家言に  
 留慈ぬらんといひし心め云の漢松と傳ふ事  
 つとこれ後を折列せしり  
 石見れや平くつら山に暮のまもり我あり神と傳ふらん  
 人も石見圓日書をもまてよぬる時の言  
 傳ふらんせんか我のまてくもくもまて  
 といふなりて見ふやまたり神物もよぬ  
 切れぬもよらぬもよらぬ  
 家日河れしげりもよらぬもよらぬわかれぬらん

せき岩松のり  
 りし自徳のり  
 惟れまの書空家  
 てはく徳のり

